

徳山毛利家と徳山

山口県文書館 副館長

小山良昌

一 毛利家の沿革

毛利家の祖先は天徳日命と伝える。第十四代の子孫には出雲国出身で垂仁天皇に仕え、埴輪をもって殉死に代えることを奏上し、その功によって土部宿禰の姓を賜った野見宿禰の名前が見える。第二十八代大枝（のち大江姓）音人は清和天皇の侍読となつて参議に任じた。音人の後は代々文学をもつて朝廷に仕え、学問の家柄として菅原家と共に世に「菅江二家」と称された。

第三十八代の大江広元は源頼朝に招かれて鎌倉に下り、頼朝のブレーンとして武臣に列し、公文所・政所別当（長官）として活躍。武家政権に大きな影響を与えた。守護・地頭設置の建言は画期的で、代々学問で朝廷に仕えた大江氏の面目をいかに発揮したものであった。広元の次代季光は関東評定衆となり、相模国毛利庄に居を構えて移り住んだことから、これから以後毛利氏を称した。第四十代経光は越後国の一部と安芸国吉田庄を領し、その子時親は晩年吉田庄に隠退して郡山に城を築き、以後代々ここを居城とした。このわずか吉田三千貫の地を領した毛利氏が、近隣の大内氏や尼子氏など戦国大名を滅ぼして周防、長門、安芸、石見、備後など十ヶ国を領有するにまで台頭したのは毛利元就の時代である。毛利家にとって毛利元就はまさに中興の祖である。

二 初代藩主就隆と徳山

徳山毛利家は毛利輝元次男の就隆に始まる。毛利家は元就時代に急速に領地を拡大したが、長子隆元が元就よりも早逝したため、毛

利家督はわずかに十一歳の輝元が相続した。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原戦に西軍総大将として臨んだ輝元は、東軍徳川家康に敗れ、全領地を没収されるという屈辱的制裁を受けて出家し、宗瑞と号した。その後、防長兩國については輝元の長子秀就が徳川家康から拝領した。秀就は就隆の実兄である。

毛利就隆は慶長七年（一六〇二）山城国伏見に生まれ、幼名を百助、三次郎のち就隆、日向守。母は秀就と同じく輝元の側室兒玉氏で、「二ノ丸様」と呼ばれた。兄秀就が幼くして萩藩初代藩主となり、創草間もない藩体制の確立に随分と苦勞を重ねているのに対し、二男の就隆は父の慈愛を一身に受けて比較的気儘な幼年時代を過した。就隆の出生が関ヶ原敗戦後間もない時期であつて、失意の父輝元に希望と安寧を与えたことは想像に難くない。

元和三年（一六一七）厳しい藩財政にもかかわらず、秀就は父輝元とはかつて都濃郡内の総石高三万石余の領知目録を就隆に与えた。串浜・久米・末武・野上・遠石・豊井・瀬戸・戸田村など二五カ村におよんでいる。しかし、その四年後の元和七年（一六二二）就隆のたつての希望により、串浜・久米・末武村など九カ村と、富田下上・矢地・福川・富海・奈古・大井村など海岸部を中心とした九カ村との交換が行われた。なお、分封と同時に、輝元は就隆村家老として重臣桂美作、神村豊後の二人を選び、支藩創業の重任をゆだねた。

ここに、防長二州は萩宗藩を中心に、西は豊浦郡に長府毛利家、中央都濃郡に徳山毛利家、東は玖珂郡に吉川氏を配し、元就時代の吉川・小早川の両雄を評した。毛利の両川」の古事にならった姿の再現を図った。しかし、現実には輝元の思惑とは異なり、輝元亡き跡は長府毛利家、岩国吉川家はもとより、徳山毛利家も宗藩に対して

非協力、反目するケースが少なくなかった。

寛永八年（一六三二）藩主就隆は、居館である藩邸を下松河内村に築造した。その規模は屋敷周囲が九〇間四方におよび、三門を構え、前面には石を高く築き、その上に土を被って竹を植え、土塁のような荘重な構えとなっていて、対岸の笠戸島からも望見されたと言えらる。ただし、就隆が新装成ったこの下松邸に入居したのは、わずかに寛永十五年（一六三八）六月をはじめ、前後一・二回にすぎない。就隆は江戸在勤が長く、幕府重役らとの交遊も少なくなく、封地にはほとんど帰らなかつたことによる。そのうち、藩邸のある河内村が封地の最東端に位置し、かつ山陽道筋からも隔つた地にあつて不便であることを理由に、領内の適地を物色し、交通至便かつ市町としてこの地方の商業の中心地でもあつた野上の地に白羽の矢を立て、幕府の許可を得たうえで、新邸宅の建築に取りかかった。慶安元年（一六四八）のことである。

新邸の建設地は金剛山の麓、徳山藩を一望に見下ろす小高い丘陵地が選ばれた。慶安元年（一六四八）鋤始め、新始めなどの儀式を経て建築に着工し、翌二年秋には新邸が完成した。その規模は総坪数一、万六〇七四坪、「御館」と呼ぶにふさわしい広大なものであつた。ただし、「御館」を「御城」と呼び、後背の「岐山」を「御城山」などと呼ぶようになるのは、天保七年（一八三六）徳山藩が幕府から城主格を認可されるまで待たなければならなかつた。

慶安三年（一六五〇）就隆が江戸から帰国して初めて新邸に入った。これを機会に野上村の呼称を廢して徳山と称することになり、幕府へ届出てその認可を受けた。徳山藩と称するのはこれ以降のことである。この御館の完成に伴って、家中藩士の屋敷割も開始した。武家屋敷は御館と町人街の中間に位置し、承応元年（一六五二）付近一帯の田畠をつぶして地割りを行った。その四囲は東は上・下御弓町、西は今宿、南は桜馬場、北は勢屯で限り、東西を六町、南北は五町とほぼ四角形をなした。屋敷町名は東側から一番町、二番町、三番町、中央部は上中ノ丁、下中ノ丁、上本町、下本町、西側は西ノ丁、八軒丁、鐘楼丁、新丁などと符合に近い位置を示す町名で呼ばれた。もつとも、当初はこれらの町名さえも付けれず、宝永五年（一七〇八）に至つてようやく名付けられたものである。

南の桜馬場の南側は竹やぶとなつていて町人街とは一線を画し、

北方の勢屯の北側竹やぶは御館方面との境界を示した。御館へ通じる道は「堅登り」と称し、本丁の北端から竹やぶを貫いて北上する御成り道であつた。御館は一、二、三の御門で守られていた。なお武家屋敷への入口は、それぞれ閤門を設けて出入りを検問した。すなわち、町人街は南部の海岸に近い山陽道筋を中心形成した。すなわち、東は水無瀬川の橋のたもとから西へ橋本町、柁町、幸町、佐渡町、油屋町、野上町、江田町と呼ばれ、全長一三町程におよんだ。この町名も元禄十六年（一七〇三）に定めたもので、それまでは正式な町名はなく、西之端、東之端、下境、十一日市などと呼んでいた。これら本町筋以外に枝町（新町）も順次誕生していったが、これら枝町も含めすべて町奉行の支配下にあつた。

徳山街の市日については、最初十日、二十日が定日であつたが、宝永七年（一七一〇）五月に市日改正を行い、毎月十二日および二十二日と定めた。

三 三代藩主元次と徳山藩の改易

二代藩主元賢は寛文十年（一六七〇）江戸の三田邸に生まれた。延宝七年（一六七九）父就隆が亡くなった跡、わずか九歳で徳山藩を襲封した。藩主年少のため桂民部・神村将監が家老を勤めて藩政を扶けたが、元禄二年（一六八九）元賢は弱冠二十一歳の若さで急逝した。

三代藩主元次は父就隆の性格を受けつぎ、文武両道に秀でた俊才であつた。寛文七年（一六六七）京都に生まれ、初め水井龜之助、のち主計、飛騨守。元賢よりも三歳年長である侍女娘の子であつたことから、側室の元賢の弟として幕府へ届出られた。ついで、元禄二年元賢の急逝の跡を受けて、元次が急遽藩封を襲封した。

元次は自ら「徳山愚人」と号し、学を好み、伊藤長英の教えを受け、宇都宮退庵ら当時の知識人・学者と交つて研鑽し、和歌・俳句・漢詩・書に優れた。また、好學將軍として著名な五代桐吉臨席のもとに聞かれる儒者の講釈にもしばしば列席したと伝える。一方、書籍の収集も積極的におすすめ、読書のための「樓息堂」を邸側に建立し、家臣や好學の士との交遊の場を提供した。元次一代で収集した程子集書は実に三万巻余にも達したと伝える。徳山に「文化」

の香りをはじめてもたらした人は、元次と云つても過言ではない。

徳山藩の改易劇は、わずかに松木一本の伐採事件によつて幕が開いた。宗藩百姓が松木一本を伐採、それを咎められた徳山藩山廻り役人の間に殺傷事件が発生したもので、改易に至る間には両藩間に和解のチャンスは幾度もありながら改易にまで発展したのは、元次の性格に負うところが大きい。

正徳五年（一七一五）宗藩領と徳山領境界にあたる万役山での出来事である。宗藩は山廻り役人の処罰と謝罪を要求し、徳山藩はあくまでも自藩領の松を盗んだ百姓父子の非をならして正当性を主張した。両藩の主張は次第にエスカレートして不和が表面化し、藩主間の感情の対立にまで発展した。その藩主の反目の結果、翌六年四月宗藩主吉元は元次の引退を幕府へ請願するに至つた。請願の内容は次に対して礼を忘れ、非理に募り、常々の勤めも疎略に任り、本家に対して仕置正しからず候につき、家来百姓式まで落着申さず候（略）飛騨守隠居願ひ奉り候

この請願に対して幕府が下した処分内容は予想外に厳しいもので、

(1) 徳山藩は改易

(2) 所領は宗藩に返却

(3) 元次は出羽新庄藩へ、藩主一族は宗藩にそれぞれ御預け

(4) 徳山家中は宗藩において適宜処置

(5) 武家屋敷は解体

この改易は、就隆が藩を創設して以来丁度百年目の出来事であつた。

さいわいにして、四年後の享保四年（一七一九）徳山藩は奇跡的ともいえる再興が認められた。その陰には、忠臣奈古屋里人をはじめ五烈士と称される人たちの、筆舌につくし難い献身的な再興運動があり、その再興運動を資金面で支えるとともに、デモンストレーションを起こして後方活動を行った旧徳山藩領の町人・農民らの協力があつた。

新庄藩に身柄御預け中の元次が同年十月には江戸邸へ帰つてきた。その元次の急逝は帰省後数日のことで、徳山藩再興を見届けての逝去であつた。

四 七代藩主就馴と藩校鳴鳳館

就馴は元次の次男広豊の十男にあたり、寛延三年（一七五〇）江戸今井谷邸に生まれた。明和元年（一七六四）兄広豊の遺封を継いだ。幼名を専之助、大和守といひて石見守に任じた。政翁と号す。

就馴は英邁闊達、名臣奈古屋蔵人を用いてよく下情をくみ、庶政を行つて藩民を救恤した。すなわち、八十歳以上の高齢者や孝心に厚い者を表彰し、勤儉の必要を自覚させ、克己心の養成、報公心の涵養を図るなど庶民の安寧に配慮。藩士に対しても、藩吏の役所退出を晩七時と定めるとともに、遠石八幡宮の祭礼時に興行される芝居を二回までは自由観覧を許すなどして風紀・綱紀の維持を図つた。また、宗藩にならつて藩士の各家に伝来する古文書・系譜を出させて「譜録」といふ一大資料群を編さんさせ、一方で学者の本城紫峯に命じて藩主就隆・元次の詩文・歌類の編集に当らせるなど、文教方面にも意を用いた。

就中就馴の治世中最大の事業は、天明五年（一七八五）文教の興隆を図つて勢屯の御蔵元東隣の地に藩校鳴鳳館を設けたことであらう。五代広豊時代に開設された武芸稽古場を増改築したもので、文芸部門を鳴鳳館、武芸部門を聞武堂と称した。ここに徳山藩は文武両道の学館を備えることになつたのである。

学館名の由来は筑前国亀井南冥が撰したもので、周防国を中国古代の理想国家「周」に、徳山の城山を周囲の「岐山」に見立てて、「鳳凰岐山に鳴く」ことから名付けたといふ。

初代学頭の本城紫峯は、萩明倫館に学んで山根崑陽に師事し、江戸に出て滝鶴台の門下に入って勉学に励み、諸家と交つて実力を養つた。のち徳山に帰つて藩の御書物方兼御部屋方師範役を勤め、あつたわら藩の子弟を教授したが、彼の名声をしたつて九州の亀井南冥らの諸家も来徳するようになった。鳴鳳館初代学頭として青木葵園、回富嶺南、坂仲礼、谷子信、杉東山ら多くの俊英を輩出させており、藩校鳴鳳館の基礎の確立には紫峯の実力に負うところが大きい。

館の教育方針は、武士道の養成すなわち忠孝を本とし、礼儀廉恥を重んじて聖賢の道を守ることが根幹とした。また、実学を重んじて質素節儉を旨とし、政教の一致を目指していた。

授業の内容は、四書五経など中国の古典の講読、歴史書の会読および討論会などで、一カ月のうち奇数日は教師による講義、偶数日は生徒が順番に講義を行うなど、ユニークで内容の濃い授業を展開した。

創設後約五〇年を経た天保二年（一八三二）、九代藩主元蕃は学館を桜馬場の地（今の徳山小学校の位置）に移して規模の拡大と充実を図り、ついで嘉永五年（一八五二）には館名を興讓館と改めて名実ともに整えていった。

五 九代藩主元蕃と幕末維新

元蕃は文化十三年（一八一六）江戸今井谷邸に生まれ、天保八年（一八三七）八代広鎮の遺封を継いで藩主に就いた。山城守ついで淡路守、安政三年（一八五六）元蕃と改名した。兄の元璋が宗藩老臣堅田就正の養子に、元圃が同じく福原家を相続し、弟の元徳が宗藩主敬親の世子となつて、宗藩との関係は徳山藩の創設以来もつとも密接な関係にあった。

折しも嘉永六年（一八五三）黒船四艘を率いたペリール艦隊が相模湾沖に姿を現わした。元蕃は早速宗家とともに相州浦賀の警備に出陣し、これ以後、幕末維新の困難な時期を宗藩と行動を共にすることとなった。

安政元年（一八五四）徳川幕府はペリールの要求に屈し、無効許にもかわらず日米和親条約を締結した。この条約締結は徳川幕府による鎖国体制の破綻をもたらしたが、これを契機として国内は開国と親親、尊王攘夷あるいは勤王討幕、公武合体などの諸説が入り乱れ、議論が沸騰した。長州藩もこのような混乱した国内情勢とは無縁ではありえず、時代の流れに呑み込まれつつあった。

かねてより「朝廷への忠節、幕府への信義、祖先への孝道」を藩是三綱と定めていた長州藩は、安政五年（一八五八）朝廷からの密書を受けると藩兵を上京させて禁裏の警護にあたり、尊王派としての発言力を次第に強め、京都において指導の立場に立ち、ところろが文久三年（一八六三）八月十八日、薩摩藩・会津藩など佐幕派の策動が朝廷内において成功し、長州藩は一夜にして禁裏警衛を解かれ、三条実美ら革新派公家七人と共に京都を追放された（八月十

八日の政変）。このため長州藩兵は七卿を守つて西下し、山口を目指した。その際、三条実美、四条隆謨、三条西季知、壬生基修、錦小路頼徳の五卿は海路徳山の浜崎に上陸し、陸路三田尻に向つた。

それから約一年、長州藩は朝廷に対して奉勅始末書を上呈するなど再三接近を試みたが、薩摩・会津藩兵らによって堅く、ことごとく失敗した。意を決した長州藩は武力によって君側の奸を除かんとし、元治元年（一八六四）七月、徳山藩兵などと共に上京し、薩摩・会津藩兵らと戦つて大敗（禁門の変）、かえつて幕府に長州征伐の口実を与えるところとなった。幕府の第一次長州征伐は、長州藩内に共順（俗論）派、主戦（正義）派の分裂を招き、紛糾の末に俗論派が正義派を押えて幕府に謝罪恭順の意を表した。その恭順の内容は

一 益田・福原・国司の三家老の自刃
一 藩主敬親父子は城を出て、萩の寺院に誓願謹慎
などであった。

徳山藩内では重臣富山源次郎が萩の俗論派と内通して藩政を牛耳り、これに反対する革新派の河田佳藏、兄王次郎彦、本城清、江村彦之進、浅見安之丞、信田作太夫、井上唯一らの志士に弾圧を加え、彼ら反対派を葬り去つた。

一方、宗藩においては、正義派を代表する高杉晋作が奇兵隊を擁して下関功山寺に挙兵し、反対する俗論派の牙城萩を攻めて俗論派首領を一掃し、藩論を正義派に復した。

徳山藩においては未だ富山らの俗論派が政権を握つていたが、宗藩からの勧告もあつて藩主元蕃は藩政府の改革に着手し、俗論派を革新派に交代させるとともに親論書を示し

家来中は今までの私怨を忘れ、正義派に一和するよういせよと、藩論の統一をはかった。

このような状況下において、幕府は長州藩の謝罪恭順を不満とし、翌慶応二年（一八六六）第二次長州征伐軍を派遣した。いわゆる四境戦争の開戦である。この四境戦争をはじめと、長州藩は藩兵は勿論のこと、農工商人などを含む奇兵隊をはじめとする諸隊の活躍もあつて、幕府軍の撃退に成功した。ここに倒幕への歴史の歯車は回転を早め、翌慶応三年（一八六七）十月遂に徳川将軍慶喜は二百六十余年にわたつて維持し続けた大政の奉還を奏上し、同年十二月朝廷

は王政復古の号令を發した。

毛利元蕃はこの幕末維新の激動期を、藩主としてよく藩論を掌握するとともに、宗藩士歌親とは連絡を密にし、協力一致して難局に当たった。明治維新後は東京芝罘石屋敷に居を移し、明治十七年（一八八四）六十九歳で没するまでここに余生を送った。元蕃は文武諸道に優れ、特に詩歌では「岐陽ノ格處」「隨風堂」などと号し、「省耕集」「隨風集」などの著作を残した。

六 十代藩主元功とイギリス留学

毛利元功は長府藩主元運の八男である。嘉永四年（一八五二）江戸日ヶ窪の長府屋敷で生まれた。幼名を平六郎のち就右、大和守に任す。八歳で元蕃の養嗣子となり、慶応三年（一八六七）元功と改名した。この年父元蕃の名代として藩兵を率いて上京し、翌明治元年正月、いわゆる戊辰戦争の鳥羽伏見戦に参戦した。その戊辰戦争の最中の二月、英国留学の勅許を得てロンドンに留学することになった。元功の渡英はあわただしく、三月三日家臣大野内蔵允、有福二郎を伴って兵庫港から出発した。明治六年七月横浜港に帰国するまでの間、元功の勉学に励んだ模様は持ち帰ったおびただしい数の洋書や文物によって窺い知ることができる。

元功の英国留学中、日本国内では戊辰戦争が終わり、明治新政府が樹立した。明治四年元功は徳山毛利家の家督を継ぎ、帰国後は東京に居を構え、各種の公共事業に活躍した。

七 紀行文にみる徳山

徳山周辺について記された紀行文には、古くは室町時代の応安四年（一三七二）今川貞世が九州探題として西下の折に記した「道ゆきふり」がある。これによると、遠石、富田などの地名とともに徳山湾と推定される海辺を次のように描写している。

入海はるかにてこじまどもの名もしらぬがいくらもちつづきたり、其中に又いつく嶋といふも侍りし也。つりするあまの舟ども嵐にむかひていそがはしげにくるもみゆ

江戸時代になると山陽道沿いに街家が立ち並び、徳山武家屋敷と

表裏を成して城下町を形成する。安永六年（一七七七）尾張国商人菱屋平七が記した「筑紫紀行」は次のように記している。

申の刻頃徳山に着て、重岡屋金助といふ人の家に宿る。此所は毛利大和守殿の御城下なり、町の数十四五計り町いと長し。人家は瓦葺打雑りて、万の商屋一として開たる事なく見へて、宿屋も多し見ゆれども、折節旅人の往還も少くなくしてさびしく見ゆ

一方、文化二年（一八〇五）大田蜀山人の記した「小春紀行」によると、町の様子で興味を引きそうな話題を取り上げて記している。富田町を経て徳山に入った地点から記せば、

かわかけ川といふを石橋にてわたる。石橋長し、人家あり徳山とてにはしき所なり、左に石坂みえて堂あり、此市中に一生涯のぬけさる葉といふ招牌に、飯面の藪をあらはに出せる形あるは本家京都にして江戸にも多くあり、今ここにしも見る事めづらし幕末の嘉永四年（一八五二）吉田松陰が、藩主の参動に従って江戸へ登った際に記した「東遊日記」は、さすがに吉田松陰と思わせる筆はこびである。松陰は徳山街を次のように記している。

徳山は市井巖窟にして雑沓の態なし、其の居貨（店の商品）を觀るに、皆日用の要需からずんば武器書軸の類のみ、餌餅（もち類）酒肉少し、其の土風ここに於て想ふべし、其比隣（近隣）戸石（遠石）・楠浜の諸地は皆煩劇（ごたごた）して忙しいの地なり、果して其の移す所と為らざらんか、唯だ地に匪徒の暴寇を限るものなきを俟みとなす、戸石に船倉あり、地を相すること（地形をよく観察して船倉を設けている）甚だ好し

近隣の遠石や楠ヶ浜が人の出入りで雑沓としているにもかかわらず、徳山街は整然とし、商店では日用品、武器・書軸など必要品は販売しているが酒・肉・もちの類など嗜好品は売っていない。藩の威令が整然と行き届いていることに吉田松陰が感じている様子が窺える。江戸時代の徳山はこのような街であったのであろう。